THE DITCITARS of CITAMPARAM

チダンバラムのディクシタール・ブラフミン

写真: ロバート・モーゼスとバリーシルバー

テキスト: ポール・ヤンガー著“The Home of Dancing Shivan”および“The Tradition of the Hindu Temple in Citamparam” Oxford Unversity Press, 1995 から抜粋

この記事は NAMARUPA issue no.7 に掲載されたものです。NAMARUPA 共同発行人であるエディ・スターンおよびロバート・モーゼスの同意のもと翻訳・配布しています。

翻訳： 宮村 葉

ロバート・モーゼスとヴィヴェーカナンダ・ディクシタール。2012 年のナマルパ・ヤトラの参加メンバーと共に

チダンバラムのディクシタール・ブラフミンは、宗教を主体とした非常に特殊なコミュニティーである。現在、同族内での婚姻を基本とした数千人がコミュニティーを形成している。その内の婚姻した 200 名の男子が、5 つの加入儀礼を通過した後、シヴァ･ナタラジャを祀る寺院の司祭となる。この 200 名が寺院を所持･管理する民主的なグループを構成し、伝統に則った非常に手の込んだやり方で、シヴァ･ナタラジャへの礼拝儀式を行っている。ディクシタールの司祭達、およびこの地のユニークな礼拝伝統について歌われた聖歌があるが、それが作られた時期から推測すると、この伝統は少なくとも 10 世紀の中頃から続いているものだということが判る。

†††
ヨギが住まうティライの小さなホールで
踊る神ナタラジャをいつも崇拝せよ
†††

私が初めてチダンバラムを訪れたのは、兄弟弟子スワミ・ジャナルダナナンダと共に南インドを巡礼中の 1985 年のことだった。師の恩寵により、私達はディクシタール先祖伝来の地に客人として迎えられた。早朝目覚めると、この家の長兄が銅製のハバン･クンドゥ(havan kundh)と呼ばれる儀礼用具で、牛の糞を燃やし火の儀式を行っていた。彼が朝のサンディヤヴァンダ(sandhyavanda ヒンドゥの通過儀礼のひとつ)のマントラを唱えると、家の中央に設けられた土間の屋根の開口部から、煙が空へと漂い出て行き、朝の光が家の内部へと射し込み始めた。太古から永遠に続くその光景は、今でも私の心に鮮明に残っている。家の主人である父親がハリドワールへダンシング・シヴァのブロンズ像を取りに行って不在のため、この長兄が私達を迎えてくれた。私達は何も無理強いされることもなく、非常に暖かく純粋で礼儀正しい歓待をうけたが、実を言うと私はそこで話されたことをほとんど理解することが出来なかった。その日の午後になり、寺院を訪れた後に家へ戻ると、私達は別れの時を迎えた。玄関で感謝を述べていると、若くしかし落ち着いた様子のディクシタールが 1 人、通り過ぎ様にはっきりした英語で「また会おう！」と告げて去っていった。それ以来何年にも渡り、この聖なる地へと何度も何度も私は引き戻され続け、そしてある日彼が寺院にいるの見た。私達は話すことはなかったが、彼の言葉は真実となり私の心で響いている。
ロバート･モーゼス

司祭達の収入は全てカッタライと呼ばれる、細かく規定された寄贈のシステムから成り立っている。カッタライの大部分は何世紀にも渡って行われてきており、例えば実際に儀礼で使用される大量のギーや米が寺院へと寄贈される。一方、ディクシタール個人も、クライアントを得るという形でカッタライ式の関係を結んでいる。例えばクライアントの誕生日など重要な日には、その個人のための祈祷を行ない、儀式で使用した聖なる灰をクライアントへ送付する。そしてクライアントはそれに対する支払いもしくは寄贈をする。クライアントが実際に現地で儀式に参加できる場合は、まずはこの「カッタライ・ディクシタール」と会うこととなる。そしてのんびりと他の社殿などへも案内されながら、正式な儀礼の手順へと導かれていく。この際の支払いは後にメールで、もしくは寺院を去る時にホストを務めたディクシタールへ支払う。

南インド沿岸部にあるこの聖地で行われる儀礼は､およそ 2 千年間にわたり行われている。言い伝えでは、北からの苦行者が、最も儀礼を行うのが困難な場所を探してたどり着いたのがそもそもの始まりとされている。毒性の樹液を流すティライという潅木。この苦行者はあえて毒性のティライの森に分け入ると、中央にある樹液の池の側で儀礼を始めた。すると彼に加わる者達が現れはじめ、その 1 人が放浪の旅の途中にあるベンガルの王子だった。王子はこの地に深く感銘を受けると、3,000 人のその道の達人達を呼び寄せ寺院を建立し、その寺院でこの地独特の儀礼を行わせた。その儀礼こそが、今日チダンバラムで行われている儀礼だと言いわれている。

†††

アナンタの住まう敬愛されるこのティライの地、
踊る姿―ナタラジャへの儀式のため、
彼らのその偉大さは灰に覆われている
彼らの存在価値は神聖なる足元への儀礼により無限となり、
彼らはナタラジャへの愛のみに存在する
その美しき寺院での儀礼は喜びに満ち、
各々の務めに心を注ぐ
ヴェーダの教えに則り全ての慶事と儀礼を果たす
崇高さを高める美と共に

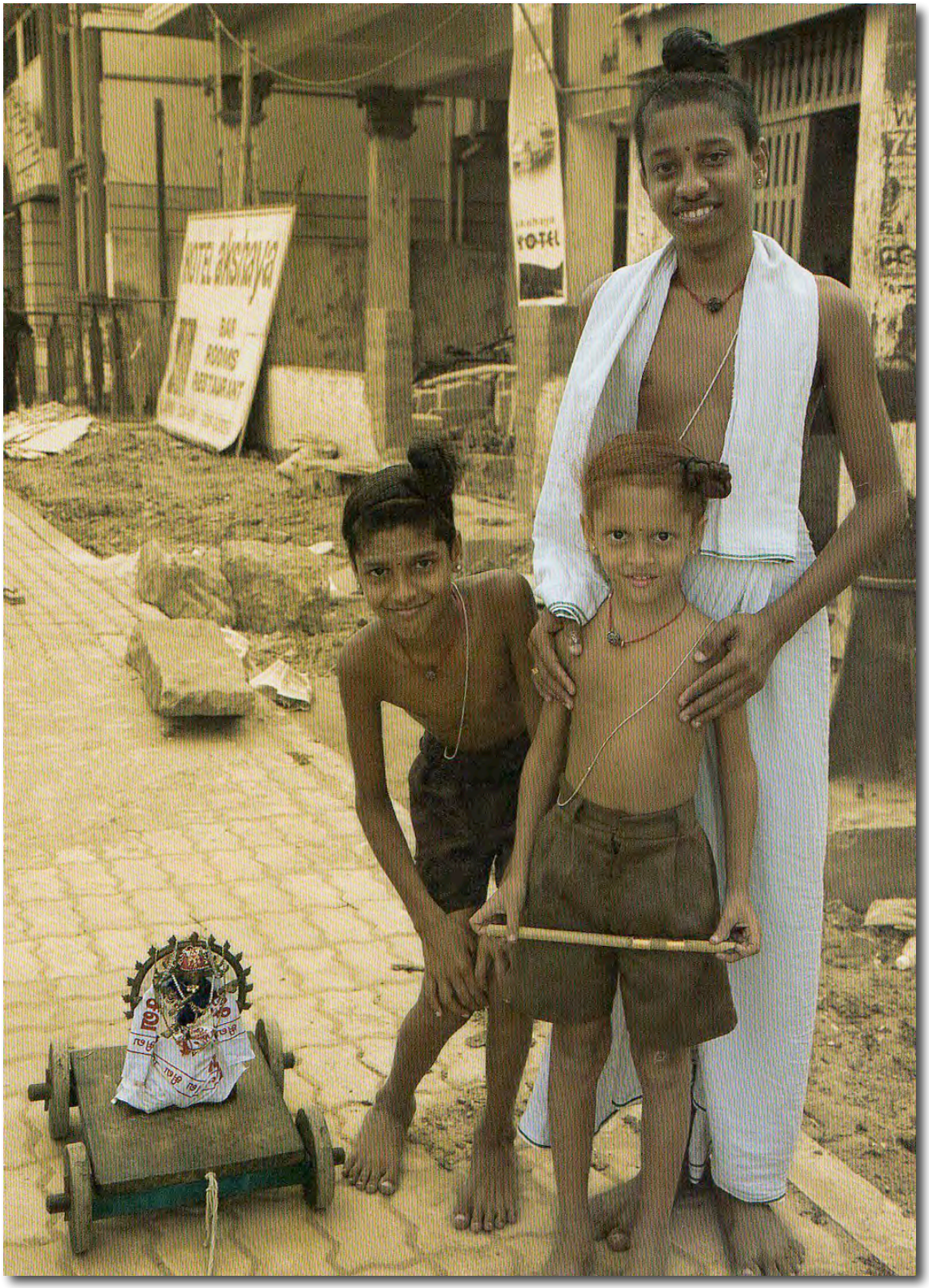
チェッキーラー　12 世紀チョーラ朝の宮廷詩人

†††

チット・サバーの屋根は人間が一日で行う呼吸の数とされる 21,600 枚の金瓦で覆われている。それらはプラーナの経路であるナディと同じ数の 72,000 本の釘で打ち付けられている。

黄金の屋根を持つ意識の館「チット・サバー」。シヴァ・ナタラジャが眠るチダンバラムの心臓部。2007 年 1 月撮影。

ホーマー（火の儀礼・護摩）を行うディクシタールの司祭達



ディクシタールの子供達。寺院の東側入り口付近にて。ダンシング・シヴァを乗せた山車のおもちゃを引いて遊んでいる。一目でディクシタールと判る、ユニークなスタイル。2007年1月撮影。

THE UNDERLYING MANAGEMENT principle in the ancient regulations the priests use is what might be called an enforced democracy. All 195 males eligible to serve as priests are members of the assembly known as Potu Diṭcitars or "Community of Initiated" of the Śrī Sabhānayakar temple of Citamparam. Once a year at a regular meeting of the assembly of priests, nine priests are chosen at random and are designated as the "committee" for the year. Among these nine the first name pulled out becomes the "secretary" and the second "vice-secretary," and these two are quite busy throughout the year representing the community in all dealings with the public. Regular meetings of the whole assembly are held at twenty-day intervals, and the secretary brings the important management problems to the group at that time.

司祭達が従っている伝統的な規則に通低している基本原則は、強制的な民主制とでも呼べる仕組で成り立っている。195 人の司祭適任者は「ポトゥ・ディクシタール」と呼ばれる集会を行う。これはシュリ・サバーナヤカル寺院に集う通過儀礼を終えた司祭達のコミュニティで形成される。定例集会で一年に一度、その年の委員が 9 名無作為に選出される。この中からさらに抽選で書記が 1 名、副書記が 1 名選ばれる。この 2 名はコミュニティの広報活動一般を担当することとなり、非常に忙しい 1 年を過ごす。20 日に一度、全員参加の集会が開かれ、書記はその都度、運営に関する重要な議題を提出する。

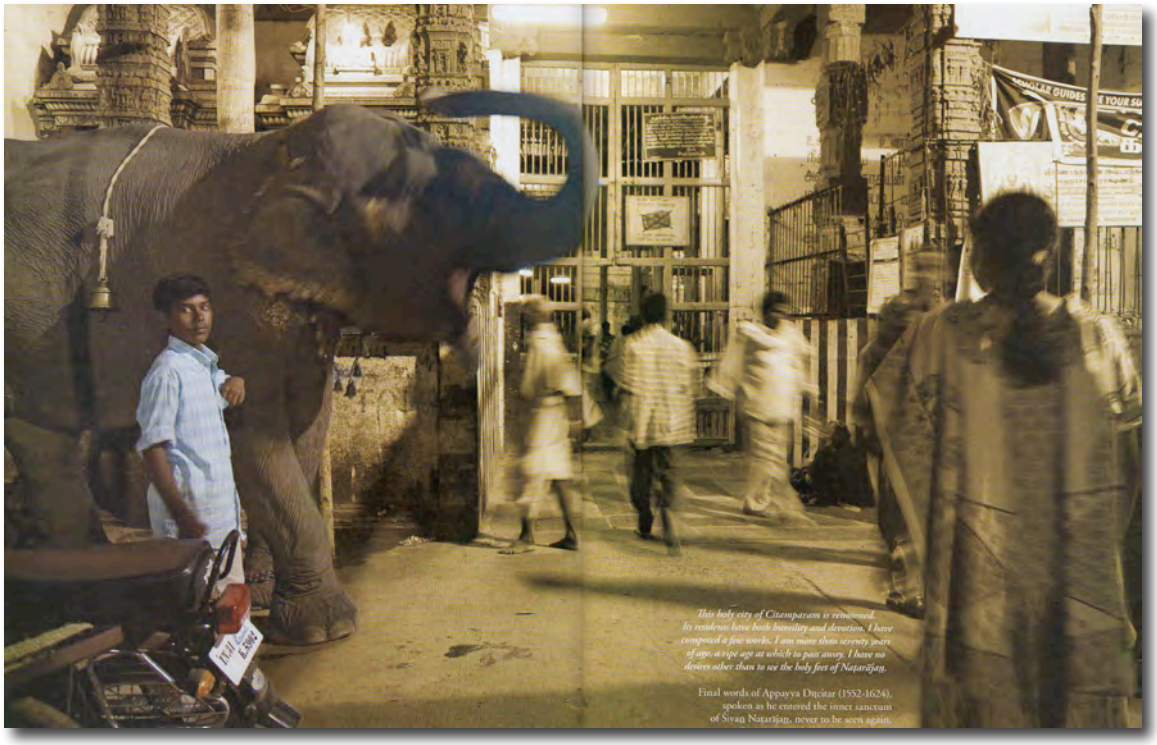
At each of the twentieth day meetings, twenty names are first chosen to provide the officiating priests for the five major shrines of the temple-complex, twenty more names are chosen for the ten minor shrines, and twenty more to be on hand to make offerings for worshippers who arrive and are not already clients of one of the Dīcitars, with various others to serve guard duty and other tasks. Even within this scheme the group of twenty appointed for the worship on the five major shrines is broken up into five groups of four, which rotate from shrine to shrine at four-day intervals, and the twenty assigned to the ten minor shrines are in groups of two, which rotate at two-day intervals. All this rotation of duties is to ensure that no one gains the prestige of remaining for a long time at the main shrine (each Dīcitar ends up serving the main image about three times a year), or of being in charge for more than a few days of the vast collections of jewels associated with particular images. The most important of all the random selections comes up just twice a year when, on the first day of each of the two major festivals, a name is drawn to determine the person who will serve as head priest of the festival. This selection is from a pool of those who have never served before, and is therefore a once-in-a-lifetime honor that comes to the priest just hours before his duties begin.

20 日ごとの集会では、はじめに寺院内の主要 5 箇所の聖域で儀礼を行う 20 名を選出する。さらに 10 箇所の小さな聖域を担当する 20 名が選ばれる。その後さらに 20 名が選出され、彼らは担当する司祭のいない参拝者に渡す奉納品を作成する。そして他のメンバーは警備やその他の業務を担当する。主要 5 箇所を担当する 20 名は 4 名ずつ 5 グループに分けられ、4 日毎に 5 箇所をローテーションで回り、10 箇所の小さな聖域を担当する 20 名は 2 人組みで 2 日毎にローテーションで各聖域を回る。ローテーションで儀礼を行うのは、一定の人物が主要聖域に長く留まり、影響を及ぼすことを避け（全メンバーが年に 3 回ずつ最主要箇所で儀礼を務められる）、膨大な量の宝飾品で飾られた特定の神像に、同じ人物が数日以上近づくことを避けるためである。さまざまなメンバー選出が行われる中で最も重要なのが、年に 2 回行われる祭の初日に行われる、その祭のリーダーの選出である。これまでにリーダーを務めたことの無いメンバーのみから選ばれる、一生に一度の栄誉ある勤めは、その役目が開始される数時間前に決定される。

左はゴーヴィントララジャン（ヴィシュヌ神の別名）が祀られているヴィマナ（ドーム型寺院建築）。奥は西側のゴプラム（門塔）背部。

「2012 年の祭りにて　右上の写真奥に山車が見える」

南インド、チダンバラムにあるシヴァ･ナタラジャを祀るこの寺院は、ヒンドゥ教を代表する寺院の１つと言える。歴史的にも寺にまつわる伝説においても、他の寺院を凌ぐものがあるが、一番のユニークな点は、インドで唯一、踊るシヴァ神を最主要神として祀る寺院であることだ。このチダンバラムの地で、シヴァ神が踊る「アーナンダ・ターンダヴァ」とは喜びのダンスであり、その姿がもたらすチダンバラムの生活は喜びに満たされている。

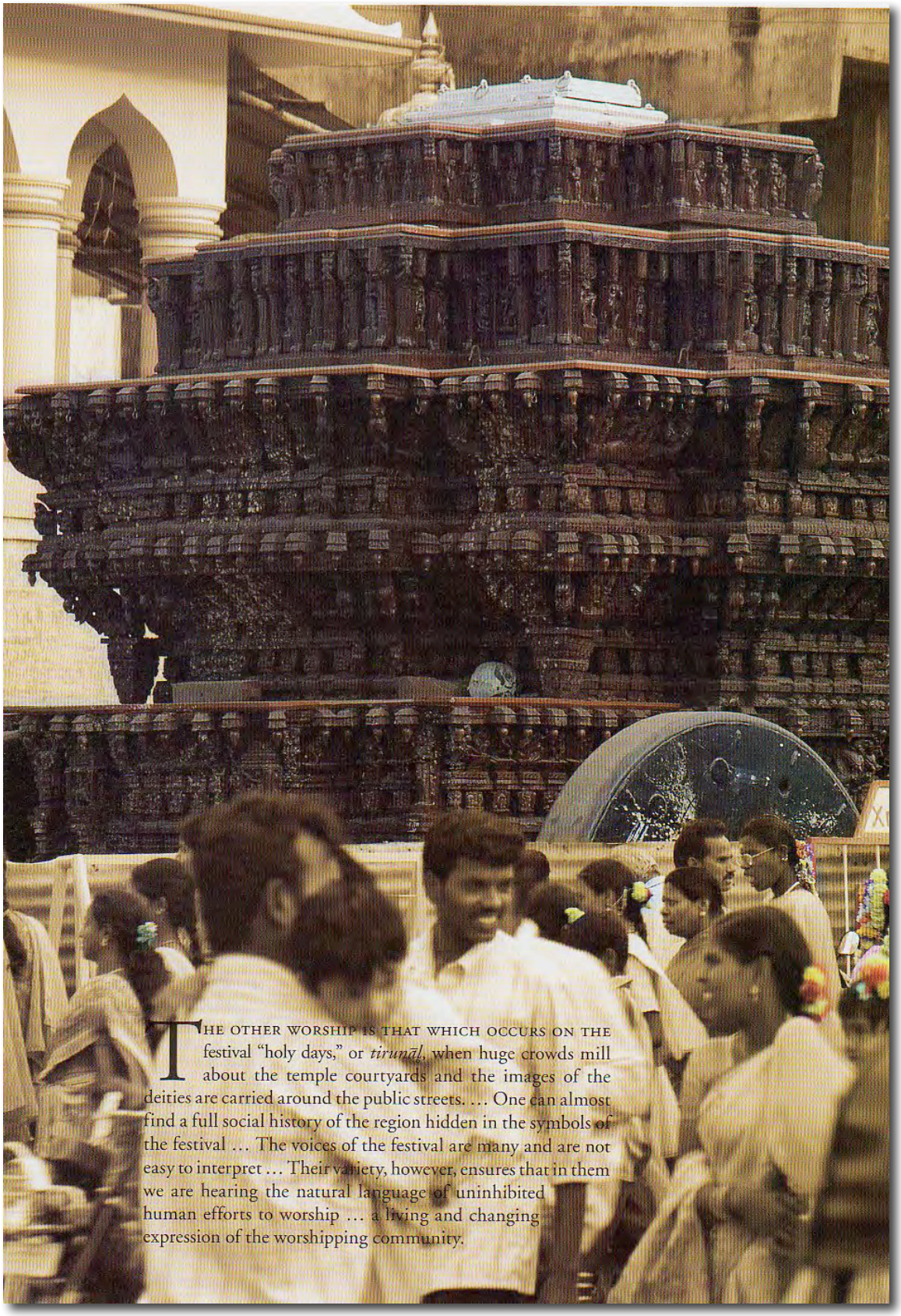


参拝者は東側のゴプラム（門塔）から内部へ入る。その日最後のカラム（儀礼）へと向かう。2007 年 1 月撮影。

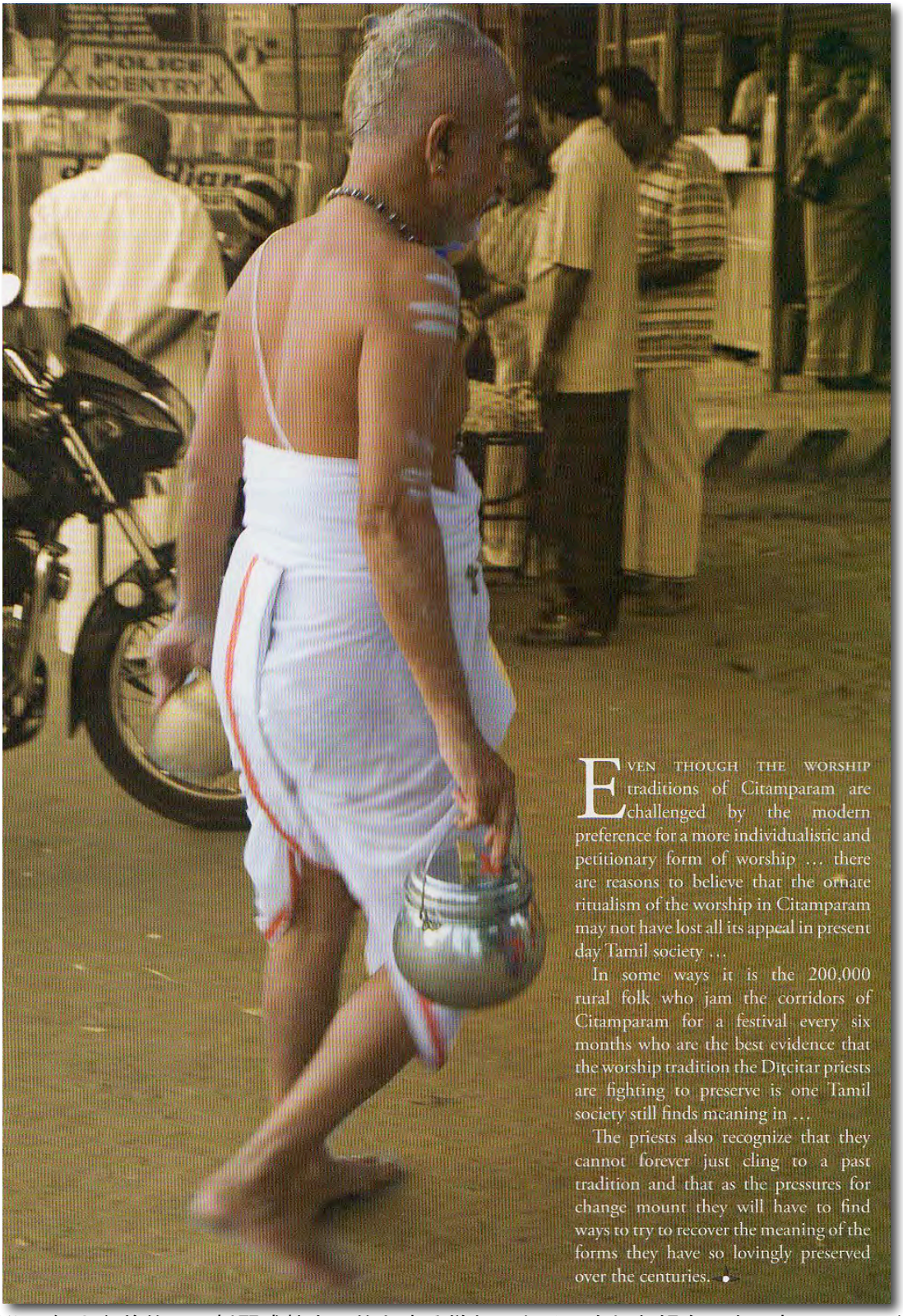
ここ地チダンバラムは名高い土地である。
住民は謙虚で献身的である。
ここで私はいくつかの務めを果し、70 歳を越え、旅立つときを迎えた。
ナタラジャの神聖な足元を目にする他に、望むものは無い。

アッパーヤ・ディクシタール（1552-1624）最後の言葉。シヴァ・ナタラジャ神の聖域内部へ入る際に残された。以降、彼を見たものはいない。

聖なる日「ティルナル」と呼ばれる祭り。そこでもまた崇拝の儀礼が行われる。寺院の敷地に多くの人々が集い、神像が山車に乗せられ道を曳かれていく。祭りのシンボルに隠された宗教的な歴史を垣間見ることができるようだ。…祭りで聞かれる声はさまざまで捉えるのが困難だ。…しかしこれらさまざまなヴァリエーションの中から、自然に解放された、人々の儀礼の様子を窺い知ることができる。…それは生きた変化する崇拝の表現である。



THE OTHER WORSHIP IS THAT WHICH OCCURS ON THE festival "holy days," or *tirunāḷ*, when huge crowds mill about the temple courtyards and the images of the deities are carried around the public streets. … One can almost find a full social history of the region hidden in the symbols of the festival … The voices of the festival are many and are not easy to interpret … Their variety, however, ensures that in them we are hearing the natural language of uninhibited human efforts to worship … a living and changing expression of the worshipping community.



EVEN THOUGH THE WORSHIP traditions of Citamparam are challenged by the modern preference for a more individualistic and petitionary form of worship … there are reasons to believe that the ornate ritualism of the worship in Citamparam may not have lost all its appeal in present day Tamil society …

In some ways it is the 200,000 rural folk who jam the corridors of Citamparam for a festival every six months who are the best evidence that the worship tradition the Dīṭcitar priests are fighting to preserve is one Tamil society still finds meaning in …

The priests also recognize that they cannot forever just cling to a past tradition and that as the pressures for change mount they will have to find ways to try to recover the meaning of the forms they have so lovingly preserved over the centuries. •

現代の個人主義的で、祈願成就を目的とする儀礼スタイルを好む傾向の中にあって、チダンバラムの儀礼の伝統は困難な局面を迎えている。とはいえその壮麗な崇拝儀礼は、現在もタミルの民にとって充分に魅力的なものである。

…半年に一度、200,000 人もの人々でチダンバラムの寺院を囲む道が埋め尽くされることは、ディクシタールの司祭達が儀礼の伝統の保存に励んでいる何よりの証拠であり、タミルの民がそこに何某かの意味を見出していることを表わしている。

…司祭達もまた、過去の伝統のみに執着していられないことを自覚している。変化への圧力が高まるにつれ、彼らが何世紀にも渡り愛し保ってきた形態の意味を、改めて見直していかなければならないだろう。